

〈論文〉

原因理由のヨッテとサカイ

—近世洒落本から昭和中期 二代目桂春団治『十三夜』まで—

三 浦 さつき

1. はじめに

条件文は、中世後期（室町期）に大きな変化が見られる。近世期も引き続き変化の影響下にある。未然形＋バと已然形＋バの意味的対立構造が崩れ^(注1)、それまで已然形＋バが順接確定用法を持つものであったところから、現代に通じる恒常性用法や仮定用法を持つものへと性質が傾く。中世前期まで已然形＋バが表していた原因理由表現は中世後期には新出の接続形式（ホドニ、ニヨッテ、アイダ、トコロデ等）で表されるようになる。本稿で扱うヨッテとサカイも中世後期以降見られる近畿地方を中心とする原因理由の表現形式である^(注2)。

- (1) a. 女：昼漬けたよって昼づけじゃ。丁度よかるふ。二本で六四になった大分下つたぜ…。

(穴さがし心の内そと、1864年頃)

- b. 蛸がお足か、銭のお足か、蛸の足、かぶるは寺の居候ってなことも言うてござりまさかいに、そらまあ、八本ながら足には違いないと思てますが。

(60R 枝雀 1909_02025 桂枝雀「蛸の手」1909年)

『浮世風呂』における掛け合いでも見られるように^(注3)、近世後期の原因理由を表す表現は近畿地方ではサカイ（二、デ）、江戸ではカラ等が代表的なものとして知られる。これら近畿地方の近世から近代におけるヨッテとサカイの用法、文法的な違いは未だ明らかとは言えないようである。小林（1977）の近世後期資料の調査、金澤（1993ab、1998）の近代落語資料の調査では、ヨッテとサカイには主に位相差があることが報告されている。ヨッテは武士層や男性の使用が多く、サカイは女性を含む身分に関わらない使用が見られるとされる。しかし階層、位相差以外にも異なりはないのであろうか。そこで、本稿ではニヨッテから変化したと考えられるヨッテは、理由節が既実現や状態性、非意志性に比重があり、それを補完するようにサカイが理由節に未実現や意志性を表す傾向にあるのではないかと推測する。観点として、①ヨッテとサカイの理由節と述部の出来事の時間的順序がどのようなか、理由節の出来事が述部の出来事よりも明示的に後を表す「Bする（となる）だろうから、Aせよ（しよう・だろう）。」（Bヨッテ／サカイA）といったものが現れるか、②理由節の時間性が既実現か未実現か、③ヨッテとサカイの前接語が意志性か非意志性か、という3点で分析する。調査対象は大坂、京都板の近世洒落本から昭和中期上方落語録音文字化資料までである。

結論を先取り的に述べると、両者は原因理由表現として同様の領域をカバーしうる性質を持ちつつも、ニヨッテや、ニヨッテから派生したと考えられるヨッテは、理由節が既実現や非意志性に比重があるのに対し、サカイは出現当初から理由節に未実現や意志性の比重がわずかではあるが高く、理由節と述部が「後→先」[A（後）するだろうからB（先）せよ／しよう]の関係を形成しやすい傾向にあると考える。

以下、2節で研究の背景と先行研究を説明し、3節では調査対象と分析方法を、4節で調査結果を示し、5節で考察を行い、6節でまとめを述べる。

2. 研究の背景と先行研究概観

2.1 研究の背景

中世後期は、先に述べたように条件表現の大きな体系変化があり、已然形＋バが確定用法から仮定用法へと変化する時期となる。それに伴い已然形＋バが表していた順接確定表現が他の接続辞で表されるようになる。よく知られるのがホドニによる原因理由の表現である。中世後期、戦国時代あたりの抄物資料においては原因理由表現の主流形式はホドニであったところから、末期には変体漢文由来で体言承接から活用語承接へと拡大したニヨッテ（吉田 2007、2019）が同じ領域に侵出し、ホドニを圧倒する（小林 1973、吉田 2007、2019）。一方、ホドニは中世後期の末期資料では～ウホドニ（だろうから）という、理由節に推量形式をつけて未来の予想を述べる新たな用法を得、已然形＋バやニヨッテが表せなかった領域に侵出した。ホドニは1400年代まで、具体的には『応永二十七年本論語抄』まではウ＋ホドニの形が見られず、已然形＋バの用法をそのまま引き継いだことが考えられる。その後、ウ＋ホドニの形になった。そして、そのホドニの理由節の未実現への拡大が、当時口語表現になりつつあったニヨッテの原因理由表現への拡張の契機ともなったと考えられている（吉田 2007、2019）。吉田（2019）は、已然形＋バの用法を原因理由、偶然条件、一般条件（恒常条件）の3つとするが、この3つの用法は「前件の成立した後に後件が成立するという認識上の先後関係がある点で共通して」おり、「後一先」関係は見られないという（p.3）。已然形＋バも接続助詞バの前に推量のム（ウ）を接することができない。推量ムの已然形メ＋バという形がありえず、「～だろうから」という表現ができないのである。このようなウ＋ホドニによる「後一先」の因果関係が新たに形成されたことから、ホドニが表していた従来の現実事態に基づいた原因理由（「客観的因由」）ではなく、予測や意志に基づいた主観的な原因理由（「主観的因由」）を表すようになることで、その表現領域が広がったとされる。吉田（2007、2019）では、これら構造の入り組みを以下のように図示する。

	(客観的因由)	(主観的因由)
I 「已然形+ば」の段階	已然形+ば	
II 「ほどに」の段階	ほどに	
III 表現領域拡張の段階	ほどに	う+ほどに
IV 「によって」侵出の段階	によって	ほどに

〔図1〕吉田 2007、2009 による中世後期の已然形バと
ホドニ・ニヨッテの入り組み

この図から、ニヨッテは従来の已然形+バで表される領域を引き継いでいることが推測される。ニヨッテが客観的因由、つまり現実事態に基づいた叙述で、かつ事態の時間的順序が「先—後」関係を形成したことが想像される。

その後、ホドニ形式は述部が働きかけの表現に偏り、数を減らしていく（小林千草 1977）。ニヨッテは近世にかけて減少し、ヨッテへ変化して勢いを増すが、次にサカイ二等が登場する。このヨッテがニヨッテの用法を引き継いだ可能性を考え、出現順からヨッテの表せない領域にサカイが侵出したのではないかと推測した。

2. 2 先行研究

2. 2. 1 ヨッテとサカイ

『全国方言地図』第一集第 37 図では、ヨッテは大阪市中部（中河内地域、東大阪あたり）に〈-jotte〉〈-jotteni〉のマークで見られる。サカイの使用に関しては近畿地方全域および中部地方、能登半島にまで及ぶ。サカイは 2025 年現在でも近畿地方で使用される伝統的な原因理由表現である。方言学によれば、サカイは現在の京都地方で使われており、ヨッテ（ニ）は京都ではサカイに比べて少なく、舞鶴の京口地域などで使用されているという（中井 2002）。

ヨッテやサカイを扱った共時的方言研究には柳田（1934）、小林好日（1944）、中井（2002、2008）、船木（2007）が見られる。歴史的研究には亀井（1936）、小林千草（1977）、金澤（1993ab、1998）矢島（2022）

による蓄積がある。言語地理学では彦坂（2000、2005）による近畿、江戸・東北方言のサカイ（二）の報告がある。

ここでは歴史的記述、特に西国資料を扱ったものを中心に概観する^{（注4）}。これまでの研究ではヨッテとサカイの使用に関し、位相による異なりは指摘されているが、それぞれの表現形式の具体的な用法、文法的違いは未だ明瞭ではないことが見える。これまで明らかにされていることを大まかに述べると以下になる。

- ・出現の様子では、ヨッテとサカイでは、ヨッテが早い（亀井 1936）。
- ・ヨッテ、サカイともに複数の語形があり、ヨッテはヨッテとヨッテニ、サカイにはサカイニ、サカイデ、サカイの3つがある。サカイニの方が古態であり規範的であったが、元禄期にはサカイデの勢力が伸びたとしている（亀井 1936、p.32）。
- ・近世資料においてニヨッテは武士層や庶民の男性話者に見え、サカイは女性、もしくは商人を含めた庶民の層に見られる、という性差、位相による違い（小林 1977）。
- ・近代上方落語資料においては若年層および女性役の場合にサカイが使用される（1993a、1998）。

更に小林千草（1977）、金澤（1993a、1998）を詳しく見ると、小林千草（1977）では近世上方資料におけるサカイを中心とし、中世後期から近世前期の原因理由表現の中心形式であるホドニやニヨッテの様子から辿った調査がなされた。金澤（1993a、1998）では、近世上方資料から近代大阪語資料にかけて、古くからあったヨッテが近代にかけて減り、サカイが増える傾向が捉えられている。

小林千草（1977）では、ホドニは中世後期の抄物資料においては原因理由表現の9割を占める中心的存在であったが、後にニヨッテに侵食されるとする（参照2節）。しかし近世においてホドニは消滅した訳ではなく依然使用が見られ、1750年代以降、100年近くの間、後件には命令や依頼の用法ばかりが見られた後、文献上で消滅する。

ニヨッテは1753～1832年の間は「後件が命令、依頼の場合で、かつ、上接語が推量・意志（特に意志）を表すものである場合以外は、他の表現形式をおさえて、最も活躍をし」（p.330）、1693年から1747年にかけて後件が事実の叙述に偏り、前接語に指定（断定）のヂャが多く表れる。笑話集『軽口五色昏』（1774）から『鳩翁道話』（1832）の頃には後件に命令や依頼の用例が出現し、原因理由表現で表せる全ての場合が見られるという。

サカイは、「サカイ系は、近世全期を通じて、ニヨッテ系をしのぐことはできなかった」（p.341）と結論づける。サカイはまとまった数が見られるのは西国の咄本『鹿の巻筆』（1686）からであるという。使用における位相としては、17～19世紀初期にかけてニヨッテは武士から庶民まで広く使われるが、サカイは庶民層に偏ることが指摘される。ただし、近世後期洒落本のヨッテとサカイにはそのような差はなかったとする。

金澤（1993a、1998）では小林論文を承け、近世後期大坂板の洒落本から明治期上方落語速記資料と、SP盤落語音声資料における体系的な原因理由表現の調査、加えて昭和初期落語速記同人誌『上方はなし』でのヨッテとサカイが追加で調べられた。金澤論文における近世から近代の調査において、原因理由表現体系は大局的に、古くからあったヨッテが近代にかけて減り、サカイが増える傾向が捉えられる。

以上のように、これまでの研究ではヨッテとサカイの使用に関し、文法的違いは未だ明瞭ではないことが伺える。

2.2.2 近畿地方の近世後期から近代における他の原因理由辞

ここで、先行研究で調べられた近世から近代の近畿地方の他の原因理由辞の様子に関しても記す。大局的には他の理由辞としてノデとカラも登場するが、洒落本では数が少なく、SP盤でノデとカラが同等数になる様子である。

金澤（1993a、1998）の近世後期洒落本、近世後期戯作（穴さがし心の内外等、幕末 - 明治初期）、明治期落語速記資料（1890—1892）、明治—大正期 SP 盤落語録音資料（1911—1926）、昭和初期『上方はなし』（1936—1938）の調査によれば、大まかには江戸後期の近畿地方洒落本ではヨッテ（ニヨッテ含む）とサカイが原因理由辞の中心である。同じく江戸後期『穴さがし〜』等戯作以降ノデが増え始め、明治期落語速記本（1890-1892）ではカラもノデを追って見られるようになる。SP 盤落語ではノデとカラが同数になる（両者併せて全体から 2 割）。金澤（1993a,1998）で示された原因理由体系の調査に本稿で手を加えたものを表 1 に示す。後期洒落本と SP 盤落語のみとする。

表 1 にはない明治中期の落語速記資料（1890 から 1892 年まで）ではサカイは数が少ないのであるが、表 1 に見られる江戸後期から大正末期まではサカイの使用はほぼ同数であり、割合としては他のものとの兼ね合いで増える傾向にある。ヨッテ系の使用が激減しており、ノデとカラが併せて 2 割 5 分程度と、洒落本の 1 割以下から増える様子が見える。ノデに関しては、江戸末期から明治初期は事実の客観的な叙述であり、話のスタイルや属性等については特に際立った所は見られず、一般の話しことばにおいても使用されていたであろうことが予想されている。またノデは明治末期には丁寧なスタイルに多いという。加えてユエニは男性に多く使用され堅い調子の言葉であったようで、ノデとは異なるという。カラとノデには全体的に使用率の微弱な増加と安定が認められる。

[表1] 金澤(1993a,1998)の調査結果
(上段、江戸後期大阪板・京都板洒落本、下段 SP 盤落語音声資料)

表現形式 作品			ユエ (二)	ホドニ	ヨッテ系			サカイ系			カラ	ノデ	計
					ニヨッテ	ヨッテ	ヨッテニ	サカイデ	サカイニ	サカイ			
洒落本	月花余情 から聖遊廊	1757	8	1				3	1	7			
	郭中奇譚	1771		3	7	7							17
	短華薬葉	1786	1	2	4	1				1	1		10
	醉のすじ書	1794				2						1	3
	十界和尚話	1798	4		4	4					2	3	17
	南遊記	1800	9	8	19	18		2		5		1	62
	粋の曙	1820	2		2	1					1		6
	色深狭睡夢	1826	8	1	5	12				6	1	2	35
	北川蜆殻	1827	1		25	4				8	1		39
各計			33	15	115			33			6	7	189
(%)			(17.5)	(7.9)	(61.5)			(17.5)			(6.9)		(100)

表現形式 演 者			ユエ (二)	ホドニ	ヨッテ系			サカイ系			カラ	ノデ	計
					ニヨッテ	ヨッテ	ヨッテニ	サカイデ	サカイニ	サカイ			
SP 盤 レコード落語資料 (明治末期)	二代目 文枝	1911										1	1
	曾呂利	1903 —1911				12	13				8	1	34
	文団治	1912 頃							1	2		1	4
	文三	1903									1	1	2
	初代 枝雀	1903 —1923								8		1	9
	染丸	1923			1					6		3	11
	松鶴	1907 —1926				2	1		2	5		1	12
	文雀	1923							1	7		1	9
各計			0	0	1	14	14		4	28	11	19	82
(%)			(0)	(0)	29	(35.4)		32	(39.0)		(13.4)	(12.2)	(100)

さらに矢島（2022）は昭和中期『上方はなし』を調査し、会話文前半期（1～30集）ではカラ・サカイが多く、後半期（31～49集）ではノデ・デが増えること、ヨッテには明確な傾向がないことを示した。語り部分ではノデが中心で、武士役にはサカイ・ヨッテが用いられずカラが最も多い。子供役にはサカイが多く、女性話者は前半期にサカイ、後半期にノデが増える。

体系的に見ると、ノデやカラはSP盤落語以降に見られ、両者は総数で3割程度となる。ヨッテは3割弱、サカイは4割弱であり、両者を合わせると、カラとノデを合わせた数より多くなる。以上のように近畿地方の原因理由辞はヨッテとサカイが中心であり、本稿ではその史的展開に焦点を当てる。

3. 調査対象、分析方法

3.1 調査対象

調査対象はヨッテ、サカイともに、その使用法の異なりを見たいため、活用語接続で接続助詞相当と考えられるものに限った。『日本国語大辞典第二版』において、ヨッテは「近世上方語で「によって」から変化し、一八世紀後半から一般化した。」とある。ニヨッテは、その接続助詞化を論じた吉田（2007、2019）があり、中世後期資料で接続助詞化していることが示された。本稿ではサカイに関し、活用語接続で、かつ「境」の実質的な意味が見出せないものを接続助詞相当と認定して議論を進める。また、ヨッテにはヨッテ、ヨッテニ、サカイにはサカイ、サカイデ、サカイニと複数の語形が存在するが、本稿ではこれらを区別せずに扱う。また時代的にヨッテに先行するニヨッテに関しては別に扱う。以降、ヨッテの類を「ヨッテ系」、サカイの類を「サカイ系」と呼ぶ。

調査資料としては近世後期大坂板・京都板洒落本、近世後期上方戯作資料『穴さがし心の内そと』三篇、SP盤落語レコード文字化資料、六代目笑福亭松鶴『上方はなし』公開PDFのうち10話、『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』を対象とする。詳細は本稿末に記す。『穴さがし心の内そと』三篇、『上方はなし』10話、『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』に関しては目視調査を行った。『穴さがし心の内そと』に関しては、金澤（1993ab、1998）の調査で、一、二編には、ヨッテ系の用例しかない

ことが指摘されている。従ってヨッテ系に加えてサカイ系も見られる三篇のみを使用する。『上方はなし』のうち、資料選定は金澤（1998）の選定方針に従っている。金澤（1998）の選定方針では、ヨッテ系とサカイ系の両者が1つの作品にみられ、また校訂者が明らかなものが選ばれている。

3. 2 分析方法

1 節に述べた3つの観点とは、全て各接続助詞相当のものが表す理由節の時間性、もしくは前接語と述部を調査、分析している。理由節にあたる部分の時間性が既実現か、未実現か、また述部に当たる部分が既実現の事態を単に叙述しているか、「のや（ねんや）」、「やろう（だろう）」、「や」等、推量や断定等の何らかの判断を述べているか、意志を表しているか、願望を表しているか、命令や働きかけを表しているか等で分類した。前接語に関しては、小林千草（1977）も詳細に調べているが、本稿では動詞を「状態動詞」とそれ以外に分けて調査を行った。ここでいう「状態動詞」とは、「ある」「いる」に限定する。述部部分の様子は小林千草（1977）、金澤（1993ab, 1998）の論考にも調査があるが、理由節の時間性もセットに扱って観察したものは見られないようである。

また、サカイ系、ヨッテ系は「～やさかい（よって）。」と、文末にある場合で、その前に同じ話者の文言により論理の結果部分が前文脈に明示されている場合は、倒置のものとして他のものと同じく数え入れた。それ以外に、文内に論理の結論部分が明示されていない場合は「文末」として扱った。

4. 調査

4. 1 中世後期から近世における二ヨッテ文の時間的順序

ここでは、サカイよりも先に存在するヨッテの源流である二ヨッテの状況を見える。2 節の研究の背景で示したように、二ヨッテから派生したヨッテ系は理由節が既実現、確定形式に傾き、ヨッテ系よりも新進のサカイ系は理由節が未実現に傾くのではないかと推測する。そこで、例えば「これから雨が降るだろうから、傘を持っていきなさい。」のような、理由節の表す事態が未実現で、理由節と述部の表す事態の時間的順序が「後→先」の

ものが、ヨッテより先に存在するニヨッテと、近世から見られるヨッテ系、サカイ系ではどのくらい出現するのか見たい。理由節と述部で表す出来事の時間的順番が「B → A」で、理由節に明示的な未実現が出現する場合がニヨッテやヨッテとサカイで異なりがあるかを見ることにより、サカイよりも古いニヨッテやヨッテが理由節で既実現が多く、新しいサカイが出現当初から理由節で未実現を多く表せば、本稿の推測が正しいことが裏付けられると考える。いまところ、この観点の調査は行われていない。小林（1977）、Traugott and König（1991）、吉田（2007、2019）、北崎（2022）の論考から推測すると、順接確定の接続辞が理由節に未実現を獲得し、述部に働きかけ等の表出表現を表すのは、用法が成立してから多用される頃のようなのである。あるいは、出現時から未実現の用法が必要な環境であった場合と考ええる。まず、ニヨッテの中世後期から近世期における状況を概観する。表2からニヨッテには、中世後期では虎明本から「後→先」の例が見えるのがわかる。近世では近世後期の洒落本に見える。因みに中世後期と近世においてCHJ（日本語歴史コーパス）を見てみるとム+ニヨッテという例は存在しなかった（2025年12月30日確認）。次に表にある各分析項目の例を説明する。用例は私に表記を改め、会話に鍵括弧を付した箇所もある。

[表2] ニヨッテの理由節と述部の時間的順序

事象の順 作品	先→後 (既実現)	先→後 (未実現)	後→先	同時 (先後幅有)	同時	非時間性	体言/不定語 指示語+チャ (文頭)	文末	不明	計
天草平家 (1592)	125 (58.4)			30		26	31	2		214
天草伊曾保 (1593)	68 (65.4)			9		13	14			104
天草金句 (1593)	2 (18.2)						9			11
虎明本 (1642)	147 (47.0)		5 (1.6)	43	3	70	39	3	2	313
計 (%)	342 (53.3)		5 (0.8)	81	3	109	93	7	2	642 (100)
絵入狂言4 作 (1683— 1698)	21 (43.8)			5		18	2		2	48
近世世話物 (1703-1722)							17			17
洒落本大坂 (1757-1826)	21 (52.5)		1 [1] (5.0)	5		9	1	2		40 (100)
洒落本京都 (1764-1836)	16 (36.3)	2 (4.5)	2 (4.5)		1	10	2	11		44 (100)
計 (%)	58 (38.9)	2 (1.3)	3 (2.0)	10	1	37	22	13	2	149 (100)

- (2) a. 然る所でかの堂寺を宣旨のごとくに程経て造畢せられたに因つて、その折節に但馬の国が開いたを即ち下されて御座った。

(40- 天平 1592_01001 : 天草平家、巻第一・第一 p.4)

- b. 総別女は弱いに因つて、悪には入り易う、善には至り難いぞ。

(40- 天伊 1593_00004 : 天草伊曾保 p.43)

- c. 野牛はいつ引き上ぐるぞと待てども待てども、狐は知らぬ顔して居るに因つて野牛罵って言うは：やあ貴所は約束は忘れたか

(40- 天伊 1593_00061 : 天草伊曾保 p. 491)

- d. …「こ所で(小袖)をとれ」といふて、「いや」といふを、おとこむりにとつてみれば、おとごぜ(乙御前)なるによってにぐる、女、「のがすまひ」といひて…

(40- 虎明 1642_05005 : 虎明本、二九十八 p.19)

- e. 花車「稽古にはどこへやつてじや」ささの「けいこにやると膝付から。きわ／＼のつけとどけがもめるによって。手ほどきに内でわたしがをしへてゐるわへ」

(52- 洒落 1820_01048 : 南遊記、大坂 p.134)

- f. 幸：私しや俵子屋へ往(いく) によって耳かつて上ふと思ひちよつと鯛七へ寄つたりやなおまへはお客と連立て野側の方へ往たと聞て其通(そのとおり)を新さんにいふたれや直に野側の方へ走つてじや有たがおまへは逢やしいんだが…

(52- 洒落 1800_01017 : 南遊記 p.177 大坂)

(2a) は天草平家において喜一検校により忠盛の来歴が語られる場面で、忠盛が鳥羽院の宣旨により御願寺を建てたので、その頃に但馬の国守の任が空いたのを鳥羽院がすぐおくれになった、という説明である。「(御願寺を) 造畢したので、(鳥羽院が但馬国を) おくれになった。」と、理由節と述部に時間的な先後関係が認められるため、このようなものを「先→後」として分類した。(2b) は「女は弱いので悪には入りやすく、善には至り難いものだ」という一般論で、理由節でも形容詞で評価をし、述部においても「入り易い」「至り難い」と形容詞の接尾語で評価をしている例となる。このような時間性ではないものを「非

時間性」]として扱っている。(2c)は、水の中にいる野牛を狐が知らん顔をしている状態がある程度続いた中で野牛が狐を罵る事態が起きており、理由節と述部に先後関係はあるが、先の事態と後の事態の生起に時間の幅がある。このようなものを「同時（先後に幅あり）」と分類した。(2d)は、男が無理に女の小袖を外させ顔を見ると醜いと分かり、その瞬間に逃げている様子であるので点的な時間として「同時」としている。(2e)は、「ささの」という芸妓の妹が花車（遣手婆）に大層大きくなった、と褒められ「稽古はどこへ行っているか」と聞かれている場面であるが「稽古にやると初っ端から折々の贈り物で揉めるので、手はどきとしてうちで私が教えている」（姉「ささの」の言）と、理由節が未実現を表し、述部は理由節の内容より前に行われた行為となる。これらを「後→先」と分類している。(2f)は、主人公の芸妓お辻の友人である幸が、お辻の馴染み客、新さんに出くわし、その状況を鯛七という茶屋に寄ってお辻に報告しようとした、という場面である。「行く」は基本的にはアスペクトとして開始局面を表すが、ここでは自分の俵子屋への道行きに関し「俵子屋へ向かう現時点の様子」を指すとも「出発点から見て俵子屋への到着自体」を表すとも取れる。これらは「不明」とした。

こうしてみると、ニヨッテは中世後期では虎明本ではじめて「後→先」の論理関係を作り、江戸後期大坂・京都の洒落本にも合計3例ほど見える。先にも述べたがニヨッテが接統助詞として見られるのは15世紀の抄物資料からである(吉田2007)。積極的には「後→先」の関係を作らないが、後期の狂言資料では表すようになり江戸後期でも現れることが分かる。

4.2 ヨッテ系とサカイ系の理由節と述部の時間的順序

次にヨッテ系とサカイ系を、近世後期洒落本大坂板と京都板からSP盤落語録音資料までを見る。ヨッテ系は4.1でも述べたように、ニヨッテを除外したヨッテ、ヨッテニのみを対象とする。『穴さがし』にはニヨッテは存在しないのでヨッテ系のことだけを検討するが、SP盤落語

にはニヨッテ例も極少数存在するため、参考にニヨッテ例も示す。

〔表3〕ヨッテ系の理由節と述部の出来事の時間的順序

出来事順番 作品名	先→後	後→先	同時 (先後幅有)	非時間性	文末	文頭/ 指示詞＋ チャ (ヤ)	計
洒落本大坂 1757-1826 年	24		4	10	1	4	43
洒落本京都 1764-1836 年	5	2[1] (14.3)	1	5	4	3	21
洒落本計 (%)	29	2[1] (4.7)	5	15	5		64 (100)
穴さがし三篇 1864 年頃	5		1	2	1	2	11
S P 盤落語 1903-1926 年 ニヨッテ		2 (100)					2 (100)
S P 盤落語 1903-1926 年 ヨッテ系	9	4 (13.8)	4	4	7	1	29 (100)
S P 盤 ニヨッテ・ヨッテ 計 (後先のみ)	9	6 (19.3)	4	4	7	1	31 (100)

※ [] : 後先が決定的ではないもの

〔表4〕サカイ系の理由節と述部の出来事の時間的順序

出来事順番 作品名	先→後	後→先	同時 (先後幅有)	非時間性	文末	文頭/ 指示詞＋ チャ (ヤ)	疑問	不明	計
洒落本大坂 1757-1826 年	11	2 (7.4)	1	9	1	1	2		27 (100)
洒落本京都 1764-1836 年	1	1 (7.7)	8	1	1	1			13 (100)
洒落本計 (%)	9	3 (7.5)	9	9	6	2	2		40 (100)
穴さがし三篇 1864 年頃	6	2 (10.0)	3	8		1			20 (100)
S P 盤落語 1903-1926 年	20	14 (18.4)	8	21	10	2		1	76 (100)

表3の角括弧で示したものは「後→先」が決定的でないものとなる。表3、4から洒落本の段階では、論理関係が「後→先」の出来事の順序であるものの自体の数は拮抗している。確率を求めればヨッテ系の場合は洒落本（大坂・京都板）で4.7%となるが、先のニヨッテも加えればニヨッテとヨッテ系で総数が148例中「後→先」は6例となり4.1%と

なる。一方のサカイ系の場合は総用例数が40例中3例で7.5%である。『穴さがし〜三篇』の方は、ヨッテ系の方は0例であるのに対しサカイ系は2例で10%となる。SP盤レコード落語録音資料にあってはヨッテ系はニヨッテも併せて31例中6例で19.3%、サカイ系の方は76例中14例で18.4%となり、ヨッテ系の方の確率が若干高い状態である。ここから読み解くと、近世では絶対数が少なくなり消滅しつつあるニヨッテは、中世後期には「後→先」のものが狂言台本から1.6割近く見られるようになり、ヨッテ系に関しても近世で2割近くになる。一方、サカイ系には出現当初の洒落本から「後→先」のものが見られる。サカイ系が出現して間もない洒落本では総数の多いヨッテ系よりサカイ系の方に「後→先」の割合が多く、SP盤のようなヨッテ系の総数が少なく衰退の兆候を見せている時代には、ヨッテ系に「後→先」の用例の比率が高くなっている様子がある。サカイ系はヨッテ系よりも時代的には後で伸長するため、数が少ない初期の段階でサカイ系は理由節に未実現を表していたと言える。先にヨッテ系の例を挙げる。

- (3) a. 店の男きたり万介をみて。あれがきてゐるなとおもひながら、
おこしらへでござります梅：どこじやへ。男：はいいづつで
ござります。梅：ずらすよってよふいふておくれ。

(52- 洒落 1820_01048 箱まくら p.143 京都)

- b. 師匠「どうぞ、提灯一つお貸しなすって」主人「盲はんに、
提灯が要りますかい」師匠「私は要りませんけど、得ては、
目明きが行き当たりやがるよってに、目明き避けに」

(60R 曾呂 1908_02004：曾呂利新左衛門(二世)、盲目提灯)

(3a) は、表1の「後→先」に分類したものになるが、決定的ではないところがあり、表3で角括弧を付している。茶屋の男が迎えに来て遊女の梅にお客が来たことを知らせる場面であるが、「(客に対応する順番を) ずらすからよく言っておくれ。」と発言しているところである。お客の順番を「ずらす」ことを決めるのはその時点であるとも、「よく

言っておくれ（そのようによく説明してなんとかしておいておくれ）。』と、伝える行為が結実した後に発生する「順番がずらされた」事態であるとも取れ、両義的である。

(3b) は、SP 盤落語資料の曾呂利新左衛門の例である。目が不自由である師匠に主人が夜遅いので泊まることを勧めるが、どうしても帰るという師匠が提灯を求める場面である。「(暗がりでは) 目開きが(自分に) 当たってくるだろうから、目開き避けに(提灯がほしい)」と、提灯を求める理由として「目の開いた者が自分に当たってくる」と時間的に後になる事態が理由節にあり、述部は後の事態を予想して提灯を求める、という時間的に前の関係になっている。従って理由節と述部の時間的な順序は「後→先」と考えられる。

次にサカイ系の例を見てみたい。

- (4) a. みな：いや柳さんがおいでなさつたけれど。…あの大角さんが此間から。いつこ待て居てじやよつて。今夜はあはしましよとおもふて。其内（そのうち）鳥渡（ちょっと）御酒を出しますさかへ。おまはんがたをしらしてあげたんじやいな。

(52- 洒落 1826_01026：色深狹睡夢 p.308)

- b. 大（覚）：わたしや嬉しい。そうしたら柳は気ちがひになるじやあろなあ。なんの小づかひもいりません。入（いる）時はおまはんにもらふさかい。どふぞ家のたしになとしておくれ、（ト、五十両の封のまま平のそばへおく。）

(52- 洒落 1826_01026：色深狹睡夢 p.324)

- c. いや、竹釘なら構わんけども、金釘っちゅよなもんを打たれては、金槌の先が減りますさかい、折角じゃけど、ようお貸し申さん。

(60R 文團 1908_02014：桂文團治「儉約の極意」1908 年)

(4a) は、遊女大覚の席に茶屋の女主人が他の芸子を誘う場面である。「そのうち（後で）御酒を出すので、お前さん方（芸子衆）に知らせた。」

という意味になり、理由節と述部の関係が「後→先」になる。(4b)は、なじみ客から遊女が身受けの話をされている場面であるが、「なんの小遣いも要りません。必要な時にはお前さん（客）にもらうので、どうぞ家の足しにしてください。」と客に金を押し戻す場面である。これも「(必要な時に)金をもらう」という理由節と「(くれようとする金は家の)足しにしてくれ」と金を戻す述部の時間的關係が「後→先」になっている。(4c)は、理由節の「金槌の先が減る」のを案じて、述部の「金槌を貸さない」という論理になっているので事態の時間的順序は「後→先」になる。

金澤（1993ab、1998）も示すように、宝暦以降は既出のヨッテ系が新出のサカイよりも数として上回り続ける状況である。しかし、「B（する／となる）だろうから、Aしよう（しなさい）。」という、理由節が未来の予想をし（B）、それに先立ってAをする、という表現に関しては、ヨッテ系は中世後期の出現当初には存在せず後に見られるようになる。一方、新進のサカイは出現当初から理由節が未来のものが存在するとと言える。

4.3 理由節の時間性（既実現 / 未実現）と述部の様相

次にヨッテ系、サカイ系両者の理由節が既実現か未実現かという時間性を見たい。この分析は先の4.2の理由節が既実現を表すか、未実現を表すか、という検証を補完するものとして設けたものである。以下、ヨッテ系とサカイ系で表を掲げる。尚、ヨッテ系は体言に接するものは除外する。

洒落本の場合、金澤（1993a、1998）の調査にもあるように、宝暦には二ヨッテを含めヨッテ系の例は見られないが、宝暦以降にサカイ系を上回る例数が見られるようになり、それは京都板でも同じようである。洒落本では数として二ヨッテの方がヨッテ系よりも多いので表5に二ヨッテ、表6にヨッテ系の洒落本、表7に『穴さがし〜』以降、春団治『十三夜』までを分けて示した。表8はサカイ系の洒落本、表9は『穴さがし〜』から『十三夜』までである。

[表 5] ニヨッテ理由節の時間性と述部の表現（洒落本）※印は京都

理由節時間性 作品名 述部表現	既実現					未実現					文 末	文 頭	計
	既実現	判断 (推量等)	願 望	意 志	働きかけ	判断 (推量等)	願 望	意 志	働きかけ				
聖遊廓 1757 から 陽台遺編・ 粧閣秘言 1758 まで *原柳巷花語 1764		1											1
異本郭中奇譚 1772 *無論里問答 1776	4 1	1			1						1		7 1
短華薬業 1786	2	1	1										4
北華通情 1794	2	2											4
南遊記 1800	12	2		1	2			1					18
*嘘之川 1804	4				1						4		9
*竊潜妻 1807	2	1			1						5		9
*誰が面影 1812											4	1	5
当世粋の曙 1820	1			1									2
*箱まくら 1822	9	3		1	2				4		1		20
色深猿睡夢 1826	2	2									2		6
*興斗月 1836													
計	39	13	1	3	7			1	4		17	1	86
総計 (%)	60 (69.8)					5 (5.8)							86 (100)

[表 6] ヨッテ系理由節の時間性と述部の表現（洒落本）※印は京都板

理由節時間性 作品名 述部表現	既実現					未実現					文 末	文 頭	計
	既実現	判断 (推量等)	願 望	意 志	働きかけ	判断 (推量等)	願 望	意 志	働きかけ				
聖遊廓 1757 から 陽台遺編・ 粧閣秘言 1758 まで *原柳巷花語 1764													
異本郭中奇譚 1772 *無論里問答 1776	3	3		1									7
短華薬業 1786											1		1
北華通情 1794		1											1
南遊記 1800	12	4		1						1			18
*嘘之川 1804										1			1
*竊潜妻 1807				1									1
*誰が面影 1812											1		1
当世粋の曙 1820	1												1
*箱まくら 1822	4	1		1	1				3		2		12
色深猿睡夢 1826	6	4			2						3		15
*興斗月 1836	4									2			6
計	30	13		4	3				3	4			64
総計 (%)	50 (78.1)					3 (4.7)					8	7	64(100)

〔表 7〕 ヨッテ系理由節の時間性と述部の表現（穴さがし～春団治十三夜）

※〔 〕内はニヨッテの数

理由節時間性		既実現						未実現				文 末	文 頭	不 明	計
作品名	述部	既実現	判断 (推量等)	願 望	意 志	働 き か け	疑 問	判断 (推量等)	願 望	意 志	働 き か け				
SP 読 レ ー ド 客 語 節 原 料	穴さがし三篇	2	4	1	2							1	1		11
	総計（割合）		9 (81.8)					0 (0)							11(100)
	曾呂利新左衛門 1903～	6	4		4	5		1		1	4	1			26
	桂文三 1903～														
	桂枝雀 1903～														
	桂文團治 1908～														
	笑福亭松鶴 1908～				1	[1]					1	1			4
	林家染丸 1923～					[1]									1
	桂文雀 1923～														
	桂枝太郎 1924～														
上 方 は な し	桂米團治 1926～														
	合計	6	4		5	7		1		1	5	2			31
	総計（％）		22 (71.0)					9 (29.0)							31(100)
	吉野狐 1937		1		1								1		3
	野崎詣り 1937	3	5												8
	貝野村 1937	2			2	2					3	1			10
	口入屋 1937	5	1									3			9
	尻餅 1937	3	2			5						2	1		13
	貧乏花見 1938	3	4			4						1			12
	遊散船 1939	10	2			2									14
	お玉半 1939	1	2											1	3
	鯛貝 1939	4	1		1	1					2				9
	合計	31	18		4	16					7	7	2	1	86
	総計（％）		69 (80.2)					7 (8.1)							86(100)
	桂春団治 1951～		1												1
	合計（割合）		1 (100)					0 (0)							1(100)

〔表 8〕 サカイ系理由節の時間性と述部の表現（洒落本）※印は京都

理由節時間性		既実現						未実現				文 末	文 頭	計
作品名	述部の表現	既実現	判断 (推量等)	願 望	意 志	働 き か け	疑 問	判断 (推量等)	願 望	意 志	働 き か け			
聖遊廓 1757														
月花余情 1757		1	1											2
新月花余情 1757		1	1									1		3
陽台遺編・魁閣秘言 1758		1	2		2								1	6
異本郭中奇譚 1772														
*無論里問答 1776			1											1
短華蘂葉 1786												1		1
北華通情 1794		1												1
*阿蘭陀鏡 1798														
*昇平楽 1800 までなし														
南遊記 1800		4	1				2					1		8
*嘘之川 1804			1											1
*竊潜妻 1807														
*誰が面影 1812		1												1
*箱まくら 1822			5		2								1	8
色深猿睡夢 1826		3			1			1			1			6
*興斗月 1836												2		2
計		12	12		5		2	1			1	5	1	40
総計（％）			31 (77.5)					2 (5.0)				5	1	40 (100)

[表 9] サカイ系理由節の時間性と述部の表現（穴さがし～春団治十三夜）

作品名	理由節 述部表現	既実現						未実現						文末	文頭	不明	計
		既実現	判断 (推量等)	願望	意志	働き かけ	疑問	判断 (推量等)	願望	意志	働き かけ						
穴さがし三編		6	6			3	1				2		1	1			20
総計 (%)			16 (80.0)					2 (10.0)									20 (100)
SP 盤レ コード 落語 音源	曾呂利・桂文三 1903～															1	1
	桂枝雀 1903～	1	4		1						4	2					12
	桂文團治 1908～	3									4	1					8
	笑福亭松鶴 1908～	7	2									2					11
	林家染丸 1923～	2	1		1	2					3	3					12
	桂枝雀 1923～	1	1	1	1	4					8	2					18
	桂枝太郎 1924～	4	1			1		1			1						8
	桂米團治 1926～	3	1								1	1					6
	合計	21	10	1	3	7		1			21	11			1		76
	総計 (%)		42 (55.3)					22 (28.9)				11					76 (100)
上 方 は な し	吉野狐 1937	3			1	2					1	1					7
	野崎詣り 1937	3	1			1					1	1	1				8
	貝野村 1937		1								2						3
	口入屋 1937	5	1		1	4						1					12
	尻餅 1937	7	3	1								1					8
	寄之花見 1938										2						2
	船辨慶 1938	6	4								2	2					14
	遊飯船 1939	2															2
	お玉牛 1939	1	1			3											5
	鮎貝 1939	2	1			1					2						6
	合計	34	13	1	2	11					9	6	1				77
	総計 (%)		61 (79.2)					9 (11.6)									77 (100)
	桂春団治十三夜 1951～	17	26		2	6	1	3		1	7	5	2				70
	合計 (%)		52 (74.3)					11 (15.7)									70 (100)

表5の洒落本でのニヨツテは理由節が既実現のものが69.8%、未実現が5.8%である。ヨツテ系の洒落本例では、理由節が既実現のものが78.1%であり、未実現が4.7%となる。ニヨツテは『異本郭中異譚』（1772）から、理由節が既実現で述部にはたらきかけが見られる。理由節が未実現で述部に意志やはたらきかけの表出表現となるものは、ニヨツテでは『南遊記』（1833）、表6のヨツテ系では『箱まくら』（1800）から見られるようになる。江戸後期の洒落本の約60年の間、基本的にはニヨツテとヨツテ系ともに、理由節が既実現のものの割合が圧倒的に高いことが見える（ニヨツテ、ヨツテ系総合で理由節の既実現が77%）。

表7の『穴さがし～』から桂春団治（二代目）の昭和中期資料までは、ヨツテ系の用例が見られるのが昭和初期の『上方はなし』までとなり、昭和中期の桂春団治『十三夜』にはヨツテ系は1例となる。しかし、これは金澤（1993a、1998）の調査でも報告されるが、ヨツテ系とサカイ系は資料により片方だけが使用される等、ばらつきが見られる。噺家によって偏って使う傾向も想像されるが、笑福亭松鶴ひとりの噺が記される『上方はなし』にあっては作品ごとにそのような性質

が見られるため作品別にヨッテ系とサカイ系のどちらか一方だけが多く見られる現象を尚早に一般化はできない。表7の『穴さがし〜』から春団治までのヨッテ系も既実現の割合はどれも8割程度であり未実現は1割以下で、依然既実現の割合が高い。

一方サカイ系の方も、表8の洒落本で理由節の既実現が8割強、未実現が1割以下とニヨッテ、ヨッテ系と未実現の状況は同様である。表9のSP 盤落語から『上方はなし』までは既実現が5割5分から8割弱であり、未実現は3割弱から1割程度となる。SP 盤落語において理由節の未実現が3割弱まで増える点が注目されるが、同資料ではヨッテ系の使用が少ないこともあり、サカイ系がヨッテ系と同様の役割をしていることも考えられる。『穴さがし〜』以降、ヨッテ系は時代が降ると数が減っていくのであるが、総じて言えるのは、述部で意志、働きかけの表出表現が見られるとしても、ヨッテ系は調査資料全体に亘って理由節に既実現を表す割合が8割と多いことである。対してサカイ系も全ての調査資料を通して既実現の割合の方がやはり多くはあるが、SP 盤落語音声資料の時代には理由節が既実現のものが5割5分程度であり、未実現の割合も3割弱と洒落本から比べて2割程度増えているのが見える。まとめると、ヨッテ系は理由節が既実現に比重があり、サカイ系の方は既実現の比重がヨッテ系に比べて大きくはない、という様子が見られる。用例を示す。

- (5) a. 客：おりやまたそちのほそい手がをれ(折れ)そふにあつたに
よってかんになしてやつたのじや。

(52- 洒落 1772_01035：異本郭中奇譚 1772 年 p.322)

- b. 「まあ一杯、ちょっと出立ちに」「いや、また、汽車の時間の都合があるよってに、また大阪でゆっくり会おう。」

(60R 曾呂 1912_02010：絵手紙、曾呂利新左衛門 1912 年)

- c. 「嬢、どうぞ頼む、明日から心を入れ替へて働くよって、今日から飯食べさして」

(上方はなし、鮑貝 1936、p.36)

- (6) a. さつきにむかひの金吾さんのしもやけのうへをたたきなんし
ていたいさかい。あぶつてゐるのじやわいな。

(52- 洒落 1757_01029 : 新月花余情、大阪板 1757 年 p.318)

- b. いな何も腹は立て居やせぬけれどはやう去なねばならぬによ
つて去ぬのじや程に去なしてくれ。いゑそりや虚言 / \ 腹立
て居なさる。あの私しが此間の晩に爰へ来て居なんださかゐ
夫で御坐りますかへ

(52- 洒落 1800_01017 : 南遊記、大坂板 1800 年 p.173)

- c. 「ここあんじょうするさかい、和尚さん、どうぞお通り。」和
尚「はい。南無阿弥陀仏…」

(60R 枝雀 1909_02026 : 桂枝雀、嫌い嫌い坊主 1909 年)

- d. 「コレ / \ 御飯を食べるさかい、お給仕に来てお呉れ…、コレ、
誰も居らんのか、お給仕に来てんかいな。」

(上方はなし、貝野村昭和 11 年〈1936〉、p.18)

- e. 「ほんまにね、わたい昨夜から風邪ひいてた、エー、今日わて
あんた世話役出んならん言うて、家、出しなに嬢、『風邪引き
こんだらいかんさかい、お父さん、煎じ薬一杯、飲んで行き
なはれ」言うてね。…」

(春団治「十三夜」二番煎じ、昭和 27 年〈1952〉p.159)

(5a) は二ヨッテの理由節が既実現であり、述部も既実現のもの、
(5b) はヨッテ系の理由節が既実現で既定的、述部が働きかけのもの、
(5c) は理由節が未実現で、述部も未実現のものである。(6a) はサ
カイ系の理由節が既実現で、述部も既実現のものである。(6b) は、
サカイ系で理由節が既実現でかつ述部が疑問になっており、遊女が
なじみ客が腹を立てているのをなだめて「この間の晩にここへいな
かったからそれが理由でございますか。」と聞いている場面である。
(6c)、(6d)、(6e) は、いずれも理由節が未実現で述部が働きかけと
なっている。

4.4 ニヨッテ、ヨッテ系、サカイ系の前接語

次に、接続辞相当の前接語の様子を見る。これは、先にも述べたように小林千草（1977）や、金澤（1993ab、1998）でも行われたものであるが、両者とは重ならない資料もあること、本稿では動詞の分類を「状態性」と「非状態性」に分けている点で見方が異なるものとなる。前接語を見る目的は、ニヨッテ、ヨッテ系に前接する語には、サカイ系と比べて状態性のものが多いのではないか、という推測による。以下、表を示す。ニヨッテ、ヨッテ系に関してはそれぞれ分けて示す。

[表 10] ニヨッテ前接語（洒落本）※印は京都板

ニヨッテ	前接語 作品名	状態動詞		非状態動詞		テイルテアル		助動詞					形容詞	形容動詞	体言・指示詞 +デヤ	用言(テ) +デヤ	計
		Φ	タ	Φ	タ	Φ	タ	ヌ	ナイ	推量	尊敬	丁寧					
洒落本 大坂板・京都板 (京都板には※)	聖遊廓 1757 から 魁閣秘言 1758 まで																
	異本郭中奇譚 1772	1	1	1	1		1				1				1		6
	※原朗巷花語 1764														1		1
	※無論里問答 1776														1		1
	※風流裸人形 1776																
	矩華藝業 1786	1	1								1				1		4
	北華通情 1794														4		4
	※阿蘭陀鏡 1798																
	※昇平楽 1800																
	南遊記 1800	2		8		1		4	1						2	1	19
	※嘘之川 1804				2			1					1		3	2	9
	※竊潜妻 1807	3	1	1	1										1	2	9
	※誰が面影 1812			1	1										1		3
	当世粋の曙 1820				1										1		2
	※箱まくら 1822	1		5	3			2	1						5	3	20
	色深猿睡夢 1826	2	1	1					1						1		6
	※興斗月 1836																
	総計	10	4	17	9	1	1	7	3		2		1		21	8	84
	各種合計 (%)	14 (16.7)		26 (31.0)				10 (11.9)					22 (26.2)				84 (100)

[表 11] ヨッテ系前接語（洒落本）※印は京都板

ヨッテ	前接語 作品名	状態動詞		非状態動詞		テイルテアル		助動詞					形容詞	形容動詞	体言・指示詞・の+チャ	用言(テ)+チャ	計
		Φ	タ	Φ	タ	Φ	タ	ヌ	ナイ	推量	尊敬	丁寧	他				
洒落本大坂板・京都板 (京都板には※)	聖遊亭 1757 から 魁聞秘言 1758 まで																
	異本郭中奇譚 1772			2				1				1	1		2		7
	※原柳巷花語 1764																
	※無論里問答 1776																
	※風流裡人形 1776																
	短華藝業 1786																
	北華通信 1794													1			1
	※阿蘭陀鏡 1798																
	※見平楽 1800																
	南遊記 1800		1		3								3		4	7	18
	※嘘之川 1804					1											1
	※薩摩妻 1807	1															1
	※誰が面影 1812																
	当世粋の曙 1820												1				1
	※箱まくら 1822	1		4				1							4		10
	色深猿睡夢 1826			1	2	1		1		1			1	2	2	1	12
	※興斗月 1836				4		1								1		6
	総計	2	1	5	11	2	1	3		1		1	2	6		14	57
	各種合計 (%)	3 (5.3)		16 (28.1)				3 (5.3)						20 (35.1)		8	57 (100)

[表 12] ヨッテ系前接語（穴さがし～桂春団治十三夜まで）

ヨッテ	前接語 作品名	状態動詞		非状態動詞		テイルテアル		助動詞					形容詞	形容動詞	体言+ヤチャ	用言+ヤチャ	計
		Φ	タ	Φ	タ	Φ	タ	ン・ヌ	ナイヘン	推量	尊敬	丁寧	他				
S P 並落語音源資料	穴さがし三篇			3	4			1					1				9
	桂文三/文團治																
	曾呂利 1903～	1	1	4		5		1			4	1	2		7		26
	桂枝雀 1903～																
	笑福亭松鶴 1908～			1				1[i]			1						3[i]
	桂文枝 1912～																
	林家染丸 1923～								[i]								[i]
	文雀/枝太郎/米團治																
	計	1	1	5		5		2[i]		[i]	5	1	2		7		29[2]
	各種合計 (%)	2 (6.5)		5 (16.1)				4 (12.9)					9 (29.0)				31(100)
上方はなし	吉野狐 1937												2		1		3
	野崎詣り 1937			1	1	1		2							3		8
	貝野村 1937			2				3			1	1	1		2		10
	口入屋 1937				2				1				4	1	1		9
	尻餅 1937			4		2		1				1	1	4			13
	貧乏花見 1938			1		3				1					4		11
	船辨慶 1938			3	2	3			2				2		7		14
	遊鞍船 1939			2		1											3
	お玉牛 1939	1		3	1	1											5
	鮑貝 1939	2		2	1	1							2		1		9
	計	3		18	7	8		6	4		1	2	6	11		19	85
	各種合計 (%)	3 (3.5)		33 (38.8)				10 (11.8)			1	2	6		30 (35.3)		85 (100)
	桂団治十三夜												1				1 (100)

[表 13] サカイ系前接語 (洒落本) ※印は京都板

サ カ イ	前接語 作品名	状態 動詞		非状態 動詞		テイル テアル		助動詞					形 容 詞	形 容 動 詞	体言 +チャ	用言 +チャ	計
		Φ	タ	Φ	タ	Φ	タ	ヌ	ナイ	推 量	尊 敬	丁寧	他				
洒 落 本 大 坂 板・ 京 都 板 (京 都 板 に は ※)	聖遊郭 1757 から 世間秘言 1758 まで																
	月花余情 1757			1				1									2
	新月花余情 1757			1									1		1		3
	陽台遺編	2						1	1				1		1		6
	世間秘言 1758																
	異本郭中奇譚 1772																
	*原柳巷花語 1764																
	無輪里問答 1776			1													1
	*風流撰人形 1776																
	短華裏業 1786															1	1
	花華通情 1794												1				1
	*阿蘭陀鏡 1798																
	*昇平楽 1800																
	南遊記 1800						1		2	1					1	3	8
	嘘之川 1804														1		1
	*露伴妻 1807																
	誰が面影 1812					1						1					1
	霜まくら 1822											1			3	2	8
	色深探睡夢 1826			2	1							1			1	1	6
	興斗月 1836									1	1						2
総計		2		4	2	1	1	2	3	2	4		4		8	7	40
各種合計 (%)		2		6				5						13			40
		(5.0)		(15.0)				(12.5)						(32.5)			(100)

[表 14] サカイ系前接語 (穴さがし～上方はなし)

前接語 作品名	状態 動詞		非状態 動詞		テイル テアル		助動詞					形 容 詞	形 容 動 詞	体言 +チャ	用言 +チャ	計
	Φ	タ	Φ	タ	Φ	タ	シ ヌ	ナイ ヘ ン	推 量	尊 敬	丁寧	他				
穴さ	4		3	1	1		2	1			2	2			4	20
S P 盤 落 語 音 源 資 料	曾呂利/文枝												1			1
	桂文三 1903～										3				1	12
	桂枝雀 1903～	1		4							2				3	8
	桂文蘭治 1908～			4			1								1	8
	松鶴 1908～				1	1					1				8	11
	林家染丸 1923～			1	1	1	1	1			2		1		4	12
	桂文雀 1923～			3			1	3			6	1			4	18
	桂枝太郎 1924～			1	1	1			1		2				2	8
	桂米蘭治 1926～						1	1			1	1	1		1	6
	総計	1		13	3	3	1	6	3		17	2	3		23	76
各種計 (%)		1	(1.3)	16	(21.1)		9	(11.8)					26	(34.2)		76(100)
上 方 は な し	鮎貝			3	2									1		6
	お玉牛	2					1							2		5
	貝野村			1							2					3
	口入屋	2		4	1	1									4	12
	尻餅			2									3		3	8
	野崎指り			1	1							2	1		3	8
	貧乏花見	1		2	1	2		1					1		4	12
	船辨慶			2		2		1			2	1			6	14
	遊散船			1										1		2
	吉野狐					2		1					2		1	7
総計		5		16	5	7		4			4	3	7		25	77
各種計 (%)		5	(6.5)	21	(27.3)			4	(5.2)				32	(41.6)		77(100)

[表 15] サカイ系前接語 (春団治十三夜)

前接語 作品名	状態動詞		非状態動詞		テイル テアル		助動詞					形容詞	形容動詞	体言・ チャ	用言+ヤ	計
	Φ	タ	Φ	タ	Φ	タ	ン ズ	ナイヘ ン	推 量	尊 敬	丁寧	他				
春団 十三夜 総計	11	2			9		3	2			13	3	5		16	1 65
各種計 (%)	13	(20.0)	0				5	(7.7)					21	(32.3)		65(100)

表 10 の洒落本におけるニヨッテ、表 11 のヨッテ系前接語の様子を見ると、状態動詞の割合（ニヨッテ 14 例 + ヨッテ 3 例 = 12.1%）と打消し助動詞（ニヨッテ 10 例 + ヨッテ 3 例 = 9.2%）、形容詞（ニヨッテ 1 例 + ヨッテ 6 例 = 4.2%）、形容動詞（0 例）、体言 + チャ（ニヨッテ 21 例 + ヨッテ 14 例 = 24.8%）の合計はニヨッテ、ヨッテの総計からの割合が 51.1% になる。これにテイル、テアルも加えて考えても、ニヨッテ、ヨッテ系には状態性の前接語の多さが伺える。表 12 の『穴さがし〜』から桂春団治『十三夜』に至ると、ヨッテ系がほぼなくなることを見なければならぬが、依然として状態動詞（計 5 例）や打消し助動詞（計 15 例）、形容詞（計 20 例）、形容動詞（0 例）、体言 + ヤ（計 26 例）が前接する割合は多く、総数（123 例）の 40.0% となる。

次にサカイ系の方を見てみると、表 13 の洒落本では状態性の前接語が状態動詞（2 例）、打消し助動詞（5 例）、形容詞（4 例）、形容動詞（0 例）、体言 + チャ（8 例）で総数（40 例）の 47.5% ほどになる。表 14 の『穴さがし〜』から表 15 の春団治『十三夜』では、前接語の状態動詞（計 23 例）、打消し助動詞（計 21 例）、形容詞（計 15 例）、体言 + ヤ（計 68 例）を表 14、15 の総数（238 例）から計算すると 53.4% ほどになる。これらから、ニヨッテを含めたヨッテ系とサカイ系に関し、ニヨッテが優勢であった洒落本にあってはニヨッテは前接語が状態性のものが多く、SP 盤落語以降、サカイ系が優勢になってからはサカイ系の前接語に状態性が増える様子が見える。ここから、ニヨッテとサカイは近い性質をもっており、ニヨッテが少数になった時点でサカイがその役割を担った可能性が考えられる。

4.5 前接語が意志性が非意志性が

前項では、ニヨッテが優勢であった洒落本にあってはニヨッテは前

接語が状態性のものが多く、SP 盤落語以降、サカイ系が優勢になってからはサカイ系の前接語に状態性が増える様子を見た。次にヨッテ系、サカイ系ともに前接する語は意志性のものか、非意志性のものかという観点で見てみたい。下にデータを示す。

[表 16] ヨッテ系前接語、意志性、非意志性の分析

作品	意志性	非意志性 (含：形容詞、名詞+ ヂヤ(ヤ)、状態性)	意志 非意志 両様	そう+ヂヤ(ヤ) じゃ(二) 文頭	文 頭	不 明	計
ニヨッテ洒落本 (大坂 1772-)	10 (25.0)	28 (70.0)	1	1			40
ニヨッテ洒落本 (京都)	11 (25.0)	27 (61.4)	4	2			44
ヨッテ系洒落本 (大坂 1772-)	15 (35.7)	24 (57.1)		2	1		42
ヨッテ系洒落本 (京都)	6 (28.6)	12 (57.1)			3		21
洒落本ニヨッテ/ ヨッテ系計	42 (28.3)	91 (61.5)	5	7	4		148
穴さがし三篇	5 (45.5%)	3 (27.3%)	1	1	1		11
ニヨッテ S P 盤落語		2 (100%)					2
ヨッテ系 S P 盤落語	7 (24.1%)	20 (69.0%)	1	1			29
SP 盤ヨッテ系計	7 (22.6%)	22 (71.0%)	1	1	1		31
上方はなし (10 話)	30 (34.5%)	47 (54.0%)	4	4	1	1	87
桂春団治十三夜		1 (100%)					1

[表 17] サカイ系前接語、意志性、非意志性の分析

作品	意志性	非意志性 (含状態性)	意志 非意志 両様	そう・それ+ヂヤ (ヤ) ／じゃ+二	文 頭	不 明	計
洒落本 (大坂 1772-)	12 (44.5%)	14 (51.9%)		1			27
洒落本 (京都)	4 (30.8%)	7 (53.8%)	1	1			13
洒落本計	16 (40.0%)	21 (52.5%)	1	2			40
穴さがし三篇	8 (40.0%)	11 (55.0%)		1			20
S P 盤落語	35 (46.1%)	38 (50.0%)	1	2			76
上方はなし (10 話)	35 (44.9%)	39 (50.0%)	1	2			78
桂春団治十三夜	19 (28.4%)	44 (65.7%)	2	2			67

表 16 では、ニヨッテ例が存在する洒落本、SP 盤落語ではニヨッテとヨッテ系を分けて示している。表 17 ではサカイ系の洒落本から十三夜までを示した。これら 2 つの表から、ニヨッテを含めたヨッテ系の方はサカイ系よりも若干非意志性に比重があり、サカイ系の方には意志性の前接語が多いことが見られる。洒落本大坂板のニヨッテを見ると、

7割が非意志性であり、2割5分が意志性である。対してサカイは5割程度が非意志性、4割5分程度が意志性である。洒落本総数から見れば、ニヨッテとヨッテの非意志性は合計で6割強であり、意志性は3割弱、対してサカイ系は非意志性は5割強で意志性が4割となる。総合的な非意志性と意志性の割合は非意志性が高いが、サカイ系の方が相対的に意志性が高いことが見える。以下に用例を示す。方針としては、人称によってその主語の人物の視点から意志性かどうか、という観点で分析している。また意志動詞と非意志動詞の両方に解釈できるものも（笑う等）、文脈によって意志的であるか判断している。助動詞でテアル等が接していても、意志的な意味として使われていれば意志性としている。どちらとも解釈可能なものは「両様」として分類した。

- (7) a. 花車：ほんにそれについてわたしの所には。升やから歳暮に小豆がくるが。数のない衣裳でも出したり入たりするよつて。半季に弐三匁からの日あいをやるから。けつかふなおとくゐじやないいな。

(52- 洒落 1820_0104 箱まくら 1822p.131 京都板)

- b. 「まことに済まんのでおますけども、手紙一本、言付かっとおくんな」「あははあ、手紙ぐらいなら荷にならんもんや。」「わい待ってるよつてに、したため。」

(60R 曾呂 1912_02010 曾呂利新左衛門、絵手紙 1912)

- c. 平「最前木津甚に柳とやら。あいつがほれてゐる客が来て居(いる) よつて。そこへおれがゆきあはした。」

(52- 洒落 1826_01026 色深狹睡夢 1826 年 p.313)

- d. エー、膳椀、めし椀、菓子椀、塗り盆…、箸は二本ずつないと、ままが食べられんよつて、忘れぬように、御貸し下され候。恐惶謹言。(60R 松鶴 1908_02043 笑福亭松鶴、平の蔭 1908)

- (8) a. 助「はだか人形はどのくらゐなが能いな」富ぎく「こちの子にするのじやさかい随分大きなが能。」

(52- 洒落 1804_01018 嘘の川 1804p.81)

- b. 若旦那、これおくんなはれ。ほんとは、おくんなはったら、あんたの言うのは、どんな無理でもわたい聞くさかい、若旦那、これおくんなはれ。

(60R 枝雀 1909_02027：桂枝雀、煙管返し 1909)

- c. 万「新地で五人ともない玉さんで。店のせん香だいに。おまへが。中じくにうごかずにゐてじやさかい。書出しも留筆もをされて。どふもならんといふぜんせいの御方が。そんな事いふものか」(52-洒落 1820_01048：箱まくら 1822 京都板 p.141)
- d. 太鼓の稽古をせえ言うたかて、ほんら家に太鼓あらへんさかい、稽古できへんねん。

(60R 枝太 1924_02037：桂枝太郎、雷の禪 1924)

(7a,b) はヨッテ系の前接語を意志性として判断したものである。(7a)「出したり入れたりする」、(7b)「待っている」と、タリやテイルが接するが、表す意味が意志的であるものをそのように判断している。(7c)「来ている」、(7d)「食べられん」は、(7c)は意志性、(7b)は非意志性として判断しているものとなる。(8a)は、「するのちゃ」と「のちゃ」が接しているが、意志性として判断した。(8b)は、「聞く」を意志性として判断し、(8c)は「テチャ」が接しているが、軽い敬意として「ゐる」も含めて意味的に意志性とし、(7d)の「太鼓あらへん」の打消しは状態性、つまり非意志性として扱っている。

5. 考察

古代語では、未実現や非現実を表す述語を持つ連体節や体言から変化した接続辞の場合、体言や接続辞の前に推量辞ム(ウ)を接することが一般的であった(「むかし、世心つける女、いかで心なさけあらむ男にあひ得てしがなと思へど…」伊勢物語 63 段)。土岐(2010)は、中世後期から近世の資料にかけて、助動詞のム(ウ)の変遷を調べたものであるが、これにより、接続助詞に前接するムに関しては、狂言台本から近松にかけて意志の意味が薄れ、仮定用法が増えることが示された。また

連体法（連体節のもの）の方は、狂言台本では意志や推量の明白な意味が見られるのに対し、近松資料になると適当や当然の意味が増えるという。これを承け吉田（2011）では、ム（ウ）の従属節用法を百二十句本平家物語（斯道文庫蔵）と天草版平家物語で比較し、中世後期にはム（ウ）の従属節用法が衰退し無標形になることを示した。つまり、中世後期から近世期にかけて「ム（ウ）連体形＋体言」の形式が「活用語終止形＋体言」へと変化するのである。本稿で扱ったヨッテ系とサカイ系の用例がまとまって見られるのは、近世期から近代であるため、未実現を表す際にはその理由節に推量辞を接するものはヨッテ系の1例（9）のみを残し全て終止形になっている。

- (9) 坊「となりに居たのはその平さんじゃあつたそうで。大角が来てから。ゑらせりふじやあつたなあ。」女「そしつたことをきいてゐてじや有たじやあるよって。めのさめぬうちおかえりなはれ。」

(52- 洒落 1826_01026：色深狹睡夢 1826 年 p.324)

本稿における調査の着想は、中世後期において主流であった原因理由形式のニヨッテとホドニとの関係にある。ニヨッテとホドニにおいて、ニヨッテが已然形＋バの性質を引き継ぎ（吉田 2007、2019）、中世後期にかけてホドニを数で圧倒するなかで、ホドニが中世後期の末にはム（ウ）＋ホドニという例を持ち「だろうから」という表現を表す機能を有することから、その用法はニヨッテに侵食されなかったという現象から得ている。このことから、ニヨッテから派生したと考えられる近畿地方のヨッテ系はその理由節が確定に傾くのではないかと推測した。一方、ホドニは中世後期の初期から接続辞的な用法を持つが、その頃にはム（ウ）＋ホドニの用法を持っていない（吉田 2007、2019）。中世後期において原因理由辞をニヨッテ、ホドニに継いだ数として持っていたトコロデは、中世後期にのみに順接確定用法を持ち^(注5)、その後その用法は一部の近世西国資料にのみ数例見られるだけで資

料上姿を消すのであるが、出現しはじめの抄物資料よりも狂言台本資料においてムトコロデの形が多く見られる（小林千草 1973、三浦 2024a、b）。後に「B する（だろう）から、A しよう（せよ）。」という時間的順番が「後→先」になる表現は天草版平家物語にも 1 例見られるが、その後にも虎寛本狂言台本に見えるようになる（三浦 2024b）。Traugott and König (1991) の since の発達に関する考察でも、前接する語が状態性を表すものから未実現を意味するものへ発展することで接続辞として熟していることが示唆される。そこから推測して、そうした「後→先」の原因理由表現は、その時代の原因理由辞体系の環境と、元々持ったそれ自体の性質によって発達が導かれると考えるが、本稿における調査範囲では、近世後期洒落本において、ヨッテ系よりも出現して間もないサカイ系の方がそのような原因理由表現の比率が多いことが見えた。また、理由節と述部の時間性を分析してみると、ヨッテ系と、ヨッテ系より新進のサカイ系も基本的に理由節が既実現のものが多く、ヨッテ系が衰退する SP 盤レコード落語録音資料においても、依然ヨッテ系は既実現が 7 割と多く、ヨッテ系より数が上回るサカイ系の方は理由節に既実現が 5 割 5 分程度、理由節で述部に意志や働きかけの未実現を表す割合はそれぞれ同程度（3 割）というところであった。加えて前接語の検討では、状態動詞と非状態動詞との違いは明確には見られず、ニヨッテが優勢であった洒落本にあっては、ニヨッテの前接語が状態性のものが多く、SP 盤落語以降、サカイ系が優勢になってからはサカイ系の前接語に状態性が増える様子が見えるという具合であった。意志性、非意志性という観点ではニヨッテ、ヨッテの方が非意志性を表しやすく、サカイは意志性を表しやすいことが見えた。ここで言う意志性と非意志性の判断基準は、テイル、テアル、「行かない」といった打消しも含め、典型的な意志性の考え方である動詞の性質というより、意味で解釈しているところがあるため、基準として盤石なものとは言えないが、一定の指標を得るところにはなると考える。これらから、ニヨッテ、ヨッテ系とサカイ系ではヨッテ系の方が既実現、非意志性に比重があり、サカイ系は出現当初から時間関

係が「後→先」の因果性を表すことができ、相対的に未実現、意志性を表しやすい性質を持っていると考える。

6. まとめ

本稿では、以下について述べた。

1. 近世洒落本（大坂、京都板）におけるサカイ系の接続表現には、理由節が未実現を表し、述部との関係が時間的に「後→先」になるもの、つまり「Bする（だろう）から、Aせよ（しよう）」といった表現の用例がヨッテ系よりも確率として上回る。SP 盤落語録音資料に至っては、衰退しつつあるヨッテ系の方に「後→先」の構成を持つものが確率として高くなるが、サカイ系の場合は出現当初から「後→先」の構成が多く見られる。
2. ヨッテ系と、ヨッテより新進のサカイ系も基本的に理由節が既実現のことが多いが、ヨッテ系が衰退する SP 盤レコード落語音源資料においても依然ヨッテ系は既実現が多いのに対し、サカイ系は若干ではあるが、理由節で述部に意志や働きかけの未実現を表す割合がそれ以前の資料より多くなる。前接語が状態性かどうか、という観点では、ヨッテ系が衰退する SP 盤レコード落語音源資料においても、依然既実現が7割と多く、ヨッテ系より数が上回るサカイ系の方は理由節に既実現が5割5分程度であり、理由節で述部に意志や働きかけの未実現を表す割合はそれぞれ同程度（3割）というところであった。
3. 前接語の検討では、状態動詞と非状態動詞との違いは明確には見られず、ニヨッテが優勢であった洒落本にあってはニヨッテは前接語が状態性のものが多く、SP 盤落語以降、サカイ系が優勢になってからはサカイ系の前接語に状態性が増える様子が見えるという具合であった。
4. 前接する語が意志性か、非意志性か、という観点では、ニヨッテ、ヨッテ系の理由節に非意志性が、サカイ系の理由節には意志性が多く見られる傾向にあった。

5. 1 から 4 により、両者は同様の領域をカバーしう原因理由表現の性質を持ちつつも、ニヨッテから変化したと考えられるヨッテは、理由節が既実現や非意志性に比重があるのに対し、サカイは、出現当初の同時期から理由節と述部が「後→先」[A（後）するだろうから B（先）せよ / しよう] の関係を表しやすく、相対的に未実現や意志性のものを表しやすい傾向にあったと考える。

【注】

(注1) 未然形+バは、中世に、現代にも通じるナラバ、タラバに偏って使用されるようになる。

(注2) 以降、用例における文字表記、句読点に関しては、翻刻文にないものであっても私に改める。

(注3) 『浮世風呂』にある、江戸の女性と上方の女性の銭湯での言葉遣いに関する掛け合いのシーンはよく知られる。『「そしてまた上方の「さかい」とはなんだへ』『「さかい」とはナ、物の境目じゃ。ハ。物の限る所が境じゃによって、さうじゃさかいに、斯（かう）した境（サカイ）と云のじゃはいな』（滑稽本・浮世風呂 - 二・上）。一方、中世後期から近世初期にかけては東国抄物や、『雑兵物語』といった東国資料においても使用が見られることが報告されている（小林 1934、亀井 1936）。

(注4) ヨッテとサカイ、特に近畿地方の共時態に言及したものは柳田（1934）が早い。柳田は幼少期に播磨に居住し、後に関東に移住したようで、幼少時は子供同士ではサカイ、女性たちにサカイニが見られたことを述べている。居住時から 40 年後の執筆時に当該地方へ帰ると、サカイニは増々数が多く、更にサカイデも聞くようになったことが記されている。また大和（奈良）や河内地方（大阪南部）には一部ヨッテを使う家があることにも触れられている（p.22）。中井（2002）でも同様にサカイに関しては、サカイ、サカイデ、サカイニともに理由の接続助詞として認定され（2002、p.228）。ヨッテ、ヨッテニにも理由の接続助詞「…から、ので」と同等であり、これにもどちらも京都地方ではサカイ系に比べて少ない、少し使う人がある程度、という記述がある（2002、p.516）。

(注5) 中世後期の順接確定用法トコロデは時間的な契機を表すものが主な用法と言え、一部原因理由用法にも拡張しているものになる(三浦 2024a,b)。

〔調査資料〕

【近世後期】○近世後期洒落本、大坂板、京都板(1757年～1836年)国立国語研究所(村山実和子ほか)編(2019)『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅰ洒落本』[https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share\(Ver.1.0\)](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share(Ver.1.0)) (2025年9月25日確認) 【大坂】聖遊廓(1757)/月花余情(1757)/新月花余情(1757)/陽台遺編・姁閣秘言(1758)/異本郭中奇譚(1772)/短華藥葉(1786)/北華通情(1794)/南遊記(1800)/当世粋の曙(1820)/色深狹睡夢(1826) 【京都】原柳巷花語(1764)/無論里問答(1776)/風流裸人形(1776)/青楼阿蘭陀鏡(1798)/昇平楽(1800)/当世嘘之川(1804)/竊潜妻(1807)/誰が面影(1812)/河東方言箱まくら(1822)/興斗月(1836)、以上、『洒落本大成』中央公論○2. 近世後期上方語資料、戯作『穴さがし心の内そと』(1864頃)前田勇(1974)「穴さがし心の内そと」『近代語研究4』近代語学会(翻刻)

【近代】○SP盤落語レコード文字化資料(1903〈明治36〉年～1926〈大正15・昭和元〉年)国立国語研究所(服部紀子・松崎安子ほか)編(2022)『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅵ落語SP盤』(短単位データ1.0) https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#rakugo (2025年9月26日確認) 底本: 真田信治、金沢裕之編(1991)『二十世紀初頭大阪口語の実態: 落語SPレコードを資料として』大阪大学文学部社会言語学講座

【昭和中期】○六代目笑福亭松鶴『上方はなし』公開PDF(昭和11〈1936〉年～昭和13〈1938〉年)竹村明日香(2016—2019)「上方落語を用いた近現代京阪方言の総合的研究」日本学術振興会(JSPS)科学研究費助成事業 https://teapot.lib.ocha.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=2217 あ作品:1937年出版:吉野狐(2月1日)、「野崎詣り」(5月1日)、「貝野村」(9月1日)、「口入屋」(4月1日)、「尻餅」(12月1日)、1938年出版:「貧乏花見」(4月1日)、「船辨慶」(6月1日)、1939年出版:「遊散船」(7月28日)、「お玉牛」(1月1日)、「鮑貝」(11月1日) ※括弧の中は発行月日。作品の選定基準は金澤(1998:p.158)に従う。○二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料(昭和26〈1951〉年11月～27〈1952〉年2月)金沢裕之(1998)「二代目桂春団

治「十三夜」録音文字化資料」岡山大学文学部対照日本語学研究室発

[参考文献]

- 金澤裕之（1993a）「明治期大阪語の順接確定表現」『岡山大学言語学論叢』3
 ———（1993b）「明治期大阪語の順接確定表現（補遺）」『岡山大学文学部
 紀要』20
 ———（1998）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
 金澤裕之・矢島正浩編（2019）『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』
 笠間書院
 亀井孝（1936）「理由を表はす接續助詞「さかいに」」『方言』6-9
 北崎勇帆（2022）「原因・理由と話者の判断」『日本語文法史研究 6』ひつじ
 書房
 金田一春彦（1953）「不変化助動詞の本質（上）——主観的表現と客観的表現
 の別について——」『国語国文』22-2
 ———（1953）「不変化助動詞の本質（下）——主観的表現と客観的表現
 の別について——」『国語国文』22—3
 小林千草（1973）「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』
 94
 ———（1977）「近世上方語におけるサカイとその周辺」『近代語研究 5』
 近代語学会
 小林好日（1944）「東北方言に於ける助詞「さかい」」『國語学論集：橋本博士
 還暦記念』岩波書店
 土井忠生（1930）『近古の國語』国語科学講座V、明治書院
 土岐留美江（2010）『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』
 ひつじ書房刊
 中井幸比古（2002）『京都府方言辞典』和泉書院
 ———（2008）「京都方言の形態・文法・音韻（1）：会話録音を資料として（1）」
 『方言・音声研究』1
 前田勇（1964）『近世上方語辞典』東京堂
 彦坂佳宣（2000）「西部日本における原因・理由表現の分布と歴史：『方言文
 法全国地図』の解釈」『論究日本文学』72

- (2005) 「原因・理由表現の分布と歴史：『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から」『日本語科学』17
- 福嶋健伸 (2011) 「中世末期日本語の～ウ・～ウズ（ル）と動詞基本形～テイルを含めた体系的視点からの考察」『国語国文』80 - 3
- 船木 礼子 (2007) 「京都市方言の原因・理由表現」『全国方言文法辞典』〈原因・理由編〉 科学研究費助成金研究成果報告書 <https://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2007/2-7kyoto.pdf>
- 三浦さつき (2024a) 「中世後期資料のトコロデに関する一考察 一意味派生と因果性の接続助詞化について」『國學院大學栃木短期大学日本文化研究』9
- (2024b) 「中世後期の順接確定用法トコロデ再考－節の接続の詳細とホドニとの対照－」『國學院大學栃木短期大学紀要』59
- (2016) 「青森県東津軽郡平内町の接続表現ドゴデについての報告：東津軽郡外ヶ浜町蟹田と比較して」『日本語学論集』12
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 矢島正浩 (2013) 『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院。
- 矢島 正浩 (2013) 『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院
- (2023) 「原因理由史の再理解」『国語学研究』62.
- (2022) 「『上方はなし』に描かれる文法一原因理由辞を指標として」『国語国文学報』80
- 柳田國男 (1934) 「そやさかいに」『方言』4・1
- 湯澤幸吉郎 (1954) 『江戸言葉の研究』明治書院
- 吉田永弘 (2007) 「中世日本語の因果性接続助詞の消長―ニヨッテの接続助詞化を中心に―」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
- (2011) 「タメニ構文の変遷―ムの時代から無標の時代へ―」『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
- (2019) 『転換する日本語文法』和泉書院
- Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard König (1991) The Semantics-Pragmatics of Grammaticalization Revisited Traugott, E. C., & Heine, B. (Eds.). (1991). *Approaches to grammaticalization*, Volume I, pp.189-218.